

EPP再考：英語史における主語の分布を証拠として*

田 中 智 之

1. はじめに

Chomsky (2000, 2001) によれば、移動は一致 (Agree)、随伴 (Pied-Piping)、併合 (Merge) という3つの操作から構成されており、異なる3種類の解釈不可能素性がそれぞれの操作を引き起こすという点において、解釈不可能素性が移動を実行する役割を果たしている。この分析の下で、(1)に見られる主語位置への移動がどのように実行されるのかを考察する。

(1) [TP T be elected an unpopular candidate] → [TP an unpopular candidate [T T be elected __]]
 まず、探査子 (probe) として機能する T の解釈不可能な \emptyset 素性が、目標子 (goal) である candidate の \emptyset 素性と一致し、T の解釈不可能な \emptyset 素性と candidate の解釈不可能な格素性が削除される。次に、candidate の解釈不可能な格素性により、an unpopular candidate という句が併合される要素として選択される。そして、T の解釈不可能な EPP 素性により、an unpopular candidate が [Spec, TP] に併合される。¹

移動の実行に関わる3つの解釈不可能素性のうち、T の \emptyset 素性と格素性は LF における意味解釈には関与しないが、音声的に具現化されうるという点において、PF における音声解釈に関与する。したがって、これら2つの解釈不可能素性はインターフェイスにおける役割という観点から、その存在が動機付けられると考えられる。一方、EPP 素性は PF と LF のいずれにおいても解釈に関与しないので、そのような観点からその存在を動機付けることは出来ない。本論文では、特に古英語と中英語における主語の分布を証拠として EPP について再考し、EPP はそれぞれ PF と LF というインターフェイスにおける役割という観点から動機付けられる2つの素性に分割されるべきであることを提案する。

2. EPPの分割

本節では、Chomsky (2000, 2001) の分析に基づいて、現代英語における主語の分布がどのように説明されるのかを考察する。まず、以下に例示される他動詞文の派生から始める。

(2) Someone ate an apple.

a. T [_{v*P} Subj [_{v*} v* [_{VP} V Obj]]]

b. [_{TP} Subj [_T T [_{v*P} t_{Subj} [_{v*} v* [_{VP} V Obj]]]]]

(2) では、T の \emptyset 素性が主語の \emptyset 素性と一致し、T の \emptyset 素性と主語の格素性が削除される。そし

て、TのEPP素性を満たすために主語が [Spec, TP] に移動する。次に、虚辞の there を含む他動詞文の派生を見てみる。

- (3) *There someone ate an apple.
 a. T [_{v*P} Subj [_{v*} v* [_{VP} V Obj]]]
 b. [_{TP} there [_T T [_{v*P} Subj [_{v*} v* [_{VP} V Obj]]]]]

(3) でも (2) と同様に、Tの \emptyset 素性が主語の \emptyset 素性と一致し、Tの \emptyset 素性と主語の格素性が削除される。そして、TのEPP素性を満たすために there が [Spec, TP] に併合された結果、解釈不可能素性がすべて削除されるので、(3) のいわゆる他動詞虚辞構文が現代英語において文法的であると誤って予測されてしまう。したがって、Chomsky (2000, 2001) の分析の下では、現代英語の他動詞文において主語が基底位置に留まることが出来ず、必ず [Spec, TP] に移動しなければならないという事実が説明されない。

第二に、以下に例示される非対格文の派生について考察する。

- (4) A man appeared.
 a. T [_{vP} v [_{VP} V Subj]]
 b. [_{TP} Subj [_T T [_{vP} v [_{VP} V t_{Subj}]]]]]

(4) では、Tの \emptyset 素性が主語の \emptyset 素性と一致し、Tの \emptyset 素性と主語の格素性が削除される。そして、TのEPP素性を満たすために主語が [Spec, TP] に移動する。次に、虚辞の there を含む非対格文の派生を見てみる。

- (5) There appeared a man.
 a. T [_{vP} v [_{VP} V Subj]]
 b. [_{TP} there [_T T [_{vP} v [_{VP} V Subj]]]]]

(5) でも (4) と同様に、Tの \emptyset 素性が主語の \emptyset 素性と一致し、Tの \emptyset 素性と主語の格素性が削除される。そして、TのEPP素性を満たすために there が [Spec, TP] に併合された結果、解釈不可能素性がすべて削除されるので、(5) が文法的であることが正しく説明される。

このように、Chomsky (2000, 2001) の分析の下では、非対格文において主語の移動が随意的であることは説明されるが、なぜ他動詞文において主語の移動が義務的であるのかが説明されない。そこで、この問題を解決するために、EPPについてインターフェイスにおける役割という観点から再考する。(2)-(5) で見たように、EPPは虚辞の併合と主語の移動という2つの方法で満たすことが出来るが、それぞれの場合にどのような効果が生じるのかを考察する。

- (6) T be many students in the classroom →
 a. there T be many students in the classroom
 b. many students T be in the classroom

まず、EPPが虚辞の there の併合によって満たされる場合が (6a) に示されているが、それによって意味効果が生じることはなく、[Spec, TP] が何らかの要素によって埋められるという音

韻上の効果のみが生じる。一方、EPPが主語の移動によって満たされる場合が(6b)に示されているが、ここでは[Spec, TP]が何らかの要素によって埋められるという音韻上の効果だけでなく、意味効果も生じている。よく知られているように、there構文において動詞の後ろにある主語が非特定の読みしか持たないのに対して、(6b)のように[Spec, TP]に移動した主語については特定の読みが好まれる。そして後者の場合、残りの文全体が主語について叙述するという意味において、主語は文の話題としての機能も果たしている。

以上の議論を踏まえて、EPPが持つ音韻と意味というインターフェイスに関わる2つの効果を捉えるために、以下のようにEPPは2つの素性に分割されるべきであると提案する。

- (7) The EPP should be split into two interface-related features:
- a. a phonological (PHON) feature, requiring an element with phonological features
 - b. a predication (PRED) feature, requiring a 'subject of predication' as the unmarked topic of a sentence

Holmberg (2000) はアイスランド語の文体前置 (Stylistic Fronting) に見られる、どのような種類の範疇も前置されうるという特性を捉えるために、(7a) のPHON素性とほぼ同様の素性を仮定している。また、Cardinaletti (1997), Meinunger (2000), Saccon (1993) では、話題や前提といった概念を素性として捉え直し、それが主語の移動を引き起こすと主張されている。このような主張の背後にある、「動詞の前にある主語は文の無標の話題である」という直観を統語的に記号化したのがPRED素性であり、それは意味解釈への入力になるという点で、統語論と意味論の間の写像を容易にするという利点も持っている。さらに、(7) が正しければ、音韻効果と意味効果の両方を欠いている要素、すなわち虚辞のproは[Spec, TP]に併合されるべき理由がなくなり、概念的にその存在意義を失うことになる。4節では、英語史における主語の分布に関する事実から、虚辞のproは経験的にも存在しえないことを議論する。

以上の仮定に基づいて、(2)–(5)に見られる現代英語における主語の分布について、PHON素性とPRED素性がどのように満たされるのかを中心に考察する。まず、虚辞のthereを含まない他動詞文の派生(2)においては、[Spec, TP]への主語の移動によりPHON素性とPRED素性の両方が満たされる。一方、虚辞のthereを含む他動詞文の派生(3)においては、thereの[Spec, TP]への併合によってPHON素性は満たされるが、thereは虚辞であり叙述の主語として機能することが出来ないため、PRED素性を満たすことは出来ない。したがって、他動詞文の主語が基底位置に留まっている(3)の派生は破綻することになり、他動詞文において主語の移動が義務的であることが正しく説明される。

次に、非対格文における主語の分布について考察する前に、以下のGuéron (1980)における叙述と提示の区別を導入する。ここでの議論にとって重要なのは、叙述文の主語は存在前提を持つ話題として機能し、文の残りの部分はその属性を述べるのに対して、提示文の主語は焦点として機能し、文の残りの部分はその出現を表すということである。

(8) a. *Predication*: The subject refers to an individual or object (or a set of these) whose existence in the world of the discourse is presupposed: *thematic subject*. The VP describes a property of the thematic subject.

b. *Presentation*: The VP denotes, essentially, the appearance of the subject in the world of the discourse. (Guéron 1980: 653)

このような区別に基づいて、Guéronは非対格文が主語の読みによって叙述と提示のどちらも表すことが出来ることを観察している。例えば、(9)は主語が特定のな場合には叙述を表し、非特定のな場合には提示を表す。

(9) A man stood on the deck. (predication or presentation) (ibid.: 660)

Guéronはこの2つの解釈を統語的に区別する方法としてPP外置を挙げている。詳しい議論は省略するが、外置されたPPは焦点と結びつく必要があるので、以下に示されるように、提示文の主語からのみPP外置が可能である。

(10) A man stood on the deck with green eyes. (presentation) (ibid.)

次に、(11)のようにPP外置が他動詞文の主語には適用出来ないことから、他動詞文はたとえ主語が不定名詞句であっても叙述を表すということになる。

(11) *A girl slapped Bill twice with green eyes. (ibid.: 654)

以上の議論から、常に叙述を表す他動詞文ではTのPRED素性は義務的であるが、主語の読みによって叙述と提示のどちらも表すことができる非対格文では随意的であると結論付けられる。²このことを念頭において、非対格文における主語の分布について考察する。まず、虚辞のthereを含まない(4)においては、TがPRED素性を持つ場合には、[Spec, TP]への主語の移動によってPHON素性とPRED素性の両方が満たされ、それは叙述の主語として特定のな解釈を持つ。一方、TがPRED素性を持たない場合には、[Spec, TP]への主語の移動によってPHON素性のみが満たされるので、主語は非特定のな解釈を持つことになる。次に、虚辞のthereを含む非対格文である(5)においては、TがPRED素性を持たなければ、[Spec, TP]へのthereの併合によりPHON素性が満たされ、派生は収束する。一方、TがPRED素性を持つとすると、虚辞のthereはそれを満たすことができないので、派生は破綻する。虚辞のthereを含む非対格文は常に提示を表すので、そのような派生が破綻するのは望ましい結果である。

3. 英語史における主語の分布

本節では、英語史における節構造に関するいくつかの仮定を導入し、主語の分布に関する基本的事実を概観する。まず、Van Kemenade (1987)以降、初期の英語の節構造に関して様々な提案がなされてきたが、ここでは現代英語と同じ節構造を仮定し、機能範疇の種類や主要部と補部の位置関係等の問題については詳しく議論しないことにする。また、よく知られているように、

古英語から15世紀頃までは主節において動詞第二現象が観察されていた。Van Kemenade (1987, 1997) 等の標準的な分析に従えば、以下に示されるように、話題要素によって導かれる主節においては、話題要素が [Spec, CP]、定形動詞がCの位置を占める。

(12) [_{CP} XP [_C finite verb [_{TP} (Subj) ? [_T T [_{v(*)P} (Subj) ? [_{v(*)} v(*) [_{VP} V (Subj) ?]]]]]]]]

(12) の構造が正しいとすると、v(*)Pの境界を示す副詞等がなければ、定形動詞に後続する主語が [Spec, TP] にあるのか、v(*)Pの内部に留まっているのかを判断することが出来ない。したがって、主節は主語の分布に関する有力な証拠にならないので、ここでは従属節の語順に注目する。(13) に示されるように、従属節では従属接続詞がCの位置を占めており、定形動詞はTの位置までしか移動しないので、定形動詞に先行する主語は [Spec, TP]、それに後続する主語はv(*)Pの内部にあると決定することが出来る。

(13) [_{CP} C [_{TP} (Subj) [_T finite verb [_{v(*)P} (Subj) [_{v(*)} v(*) [_{VP} V (Subj)]]]]]]]]

以上の仮定に基づいて、英語史における主語の分布について考察する。古英語については Pintzuk (1993)、中英語については Van Kemenade (1997) が観察しているように、大多数の従属節において主語は定形動詞に先行する。このことは、古英語と中英語においても現代英語と同様に、主語は典型的に [Spec, TP] に移動することを示している。しかし、これには例外があり、Van Kemenade (1997), Ohkado (1998) の観察によれば、非対格動詞を伴う従属節においては主語が定形動詞に後続する語順が可能であった。以下に具体例を挙げるが、(14) は非人称動詞、(15) は変移動詞、(16) は受動態動詞を含む例で、それぞれaが古英語、bが中英語の例である。これらの例では、主語がイタリック体で示される定形動詞に後続する位置を占めている。

(14) impersonal verb

a. þæt him ne belimpe *se egeslica cwyde*
that them not apply the terrible saying
'that the terrible saying does not apply to them'

(ÆHom II. 536. 6 / Ohkado 1998: 69)

b. yf hym nedys *fleobotomie*
if him needs phlebotomy
'if phlebotomy is necessary to him'

(PHLEBO 37. 15 / *ibid.*: 70)

(15) mutative verb

a. þonne ðurh gode bodunge aspringað *clæne geðohtas* on
when through good preaching spring pure thoughts in
mode ðæra hlystendra
mind the listeners'

'when, through good preaching, pure thoughts spring up in the mind of the listeners'

(ÆHom I. 362. 17 / *ibid.*: 69)

- b. as of o welle comen *many trondis*
 as from a fountain come many torrents
 ‘just as many torrents come from a fountain’ (WYCSER I. 645. 849 / *ibid.*: 70)

(16) passive verb

- a. gif him bið oftogen *his bigleofa*
 if it is withdrawn its sustenance
 ‘if its sustenance is withdrawn from it’ (ÆHom I. 266. 5 / *ibid.*: 57)
- b. than me were doon *a sclauudre or vileynye*
 than me were done a slander or villainy
 ‘than a slander or a villainy should be done to me’ (Ch. B. Sh. 183 / Allen 1995: 384)

現代英語では許されないこれらの従属節の例は架橋動詞の補部ではないので、CPの繰り返し (CP-recursion) が許されない環境である。したがって、定形動詞はTまでしか移動しないので、それに後続する主語はvPの内部にあることになる。ここではVan Kemenade (1997) に従って、これらの例における主語は基底位置であるVの補部に留まっていると仮定する。また、前節で見たように、現代英語でも虚辞のthereを伴う場合には、非対格文の主語が基底位置に留まることが可能である。そして、古英語と中英語でも同様に、変移動詞と受動態動詞を伴う場合には、thereを用いた非対格文が観察される。以下では、それぞれaが古英語、bが中英語の例である。

(17) mutative verb

- a. swlice þær wære geworden *sum sacu* betweoh þa þe ...
 as if there were become a conflict between those who
 ‘as if a conflict had arisen between those who ...’
 (GD Hecht. ms.H 46. 14 / Van Kemenade 1997: 336)
- b. ac gif ðar cump *scip* to hit tobrekð
 but if there comes ship to it breaks up
 ‘but if a ship comes thereto it breaks up’ (VV 45. 19 / *ibid.*: 347)

(18) passive verb

- a. þær wæs eac geset swiþe gehende þam mere *wearm wæter* on
 there was also set very near the mere warm water in
 cyfe
 vessel
 ‘warm water was also set in a vessel, very near to the mere’
 (ÆLS I. XI. 149 / Breivik 1990: 202)
- b. ther was sene at her deth *a grete clere ness and lyght* alle full
 there was seen at her death a great clearness and light all full

of lytel children

of little children

'a great clearness and light all full of little children were seen at her death'

(Caxton 38. 27 / ibid.: 221)

4. 分 析

前節では、Van Kemenade (1997), Ohkado (1998), Pintzuk (1993) で提示されているデータに基づいて、古英語と中英語においては非対格動詞を含む場合を除けば、従属節の主語は定形動詞に先行するというを観察した。この事実から、これらの時期における他動詞文では [Spec, TP] への主語の移動が義務的であり、この点に関しては英語史を通じて変化していないことが分かる。一方、非対格文における主語の移動は英語史を通じて随意的であるが、古英語と中英語においては、(14)–(16) に示されるように、there 構文以外の文脈でも主語が基底位置に留まることが可能であり、この点において現代英語とは異なる。

なぜ古英語と中英語では非対格文の主語の分布が現代英語とは異なるのかを明らかにするために、問題となる (14)–(16) のような文の構造について考察する。その可能性としては、[Spec, TP] に虚辞の pro が存在するか否かによって、(19a, b) の2つの構造が考えられる。

(19) a. [TP pro [T V-v-T [_{vP} t_v [_{VP} t_v Subj]]]]

b. [TP V-v-T [_{vP} t_v [_{VP} t_v Subj]]]

まず、(19a) の構造にはいくつかの問題がある。顕在的な虚辞と空の虚辞が音韻素性の有無においてのみ異なるという仮定が正しいければ、(14)–(16) のような文では顕在的な虚辞も出現可能であると予測される。(17), (18) に見られるように、この予測は変移動詞や受動態動詞を含む非対格文については正しいが、Allen (1995), Ogura (1986) で観察されているように、(14) のような2つの名詞句の項を含む非人称構文においては、虚辞の it または there を含む例は全く見られない。³ また、虚辞を含む構文に見られる定性効果が問題となる (14)–(16) のような文において観察されないという事実も、虚辞の pro が存在しないことを示している。具体的には、(14a), (16a) は定の主語を含んでいる。さらに、2節で論じたように、EPP を PHON 素性と PRED 素性に分割するというここでの提案に従えば、音韻効果も意味効果も持たない虚辞の pro は、概念的にもその存在意義を失うことになる。したがって、(19a) の構造は経験的にも概念的にも妥当でないと結論付けられる。

したがって、(14)–(16) のような非対格文の構造として、[Spec, TP] に虚辞の pro が存在しない (19b) を採用する。これが正しいとすると、以下に述べるように、古英語と中英語においては、[Spec, TP] を埋めることなく T の PHON 素性を満たすことが出来たということになる。⁴

(19) The PHON feature of T can be satisfied without filling [Spec, TP] in Old and Middle English.

ただし、(14)–(16) では定形動詞の前に与格名詞句や副詞類等の要素があるので、それらがTのPHON素性を満たしている可能性がある。実際、Allen (1995) はいくつかの経験的証拠に基づいて、(14) のような非人称構文では与格経験者項が主語位置を占めていると主張している。一方、Allenによれば、(16) のような受動文において定形動詞の前にある与格名詞句が主語位置を占めていることを示す同様の証拠はない。また、(15) のような変移動詞を含む文においても、定形動詞の前にある副詞類が主語位置を占めているとは考えられない。したがって、(14) のような例における与格経験者項は [Spec, TP] を占め、TのPHON素性を満たしている可能性があるが、(15), (16) のような例では、(19) に述べたように、[Spec, TP] を埋めることなくTのPHON素性が満たされていると結論付けられる。

実際、(19) の仮定を直接的に支持する証拠が、Pintzuk (1999) において議論されている。Pintzukによれば、先行詞を持つ関係節、自由関係節、間接疑問文において、主語以外の要素が空所になっている場合でも、定形動詞がTPの先頭、すなわち関係詞や疑問詞の直後に来る語順が古英語では観察される。そして、そのような場合、主語は定形動詞に後続する位置に現れる。Pintzukの調査によれば、そのような語順は問題となる39例中4例とかなり稀であるが、ここでの分析の予測通り、4例すべてが(20) のような受動文であることが報告されている。

(20) headed relative

þa clapas his hades of þæm wæs ure *gecynd* geedneowod
 the clothes (of) his person by which was our nature renewed
 ‘the clothes of his person, by which our nature was renewed’

(Bl. Hom. 11. 9 / Pintzuk 1999: 232)

さらに、同様の語順が中英語でも見られることがOhkado (1998) で指摘されており、The Penn-Helsinki Parsed Corpus of Middle English 1 (PPCME1; Kroch and Taylor 1995) を用いた調査からも支持される。その際、主語と目的語以外の要素が空所になっている自由関係節に絞って調査したが、問題となる179例中6例において、定形動詞がTPの先頭に来る語順が観察される。そして、その中には、Pintzukの調査で報告されている(21a) のような受動文だけではなく、(21b) のような変移動詞を含む非対格文も見られる。

(21) a. free relative: passive verb

ffor whatso his þat hors bowzte
 for whatever is that horse bought
 ‘for whatever that horse is bought’

(HORSES 87. 24)

b. free relative: mutative verb

where as endith thy *rekyng*e in the Epicle

where ends your calculation in the epicycle

'where your calculation ends in the epicycle' (EQUATO 36. 236)

さらに、それぞれ (22), (23) に見られるように、先行詞を伴う関係節と間接疑問文に関しても、受動文と変移動詞を含む非対格文において同様の語順が観察される。

(22) a. headed relative: passive verb

in a worshipful town wher was o *parysch cherch & tweyn*

in a worshipful town where was a parish church and two

chapelys annexid

chapels united

'in a worshipful town where a parish church and two chapels were united'

(KEMPE I. 58. 265)

b. headed relative: mutative verb

in the see where com a *shippe* saylyng toward hym

in the sea where came a ship sailing toward him

'in the sea where a ship came sailing toward him' (MALORY 666. 992)

(23) a. indirect question: passive verb

sei me ... hweonne is þe ilenet i þine leoðebeie limen *se*

say me from where is you granted in your lissome limbs the

stealewurðe strengðe

stalwart strength

'tell me...from where such stalwart strength is granted to you in your lissome limbs'

(MARGA 81. 429 / Ohkado 1998: 59)

b. indirect question: mutative verb

I shal shew you thre conclusyons fyrste wherin stondeth

I shall show you three conclusions first wherein stands

y=e= acte of creacion

the act of creation

'I shall show you three conclusions, first where the act of creation stands'

(FITZJA C1R. 241)

なお、Pintzuk (1999) は定形動詞がTPの先頭を占める語順においては、関係詞あるいは疑問詞が主語位置を経由して移動する可能性を示唆しているため、それらの要素が [Spec, TP] を埋めることにより、TのPHON素性を満たしていると仮定することが出来るかも知れない。しかし、以下に示されるように、その内部でいかなる移動も起こっていない副詞節においても、変移動詞を含む非対格文に関して同様の語順が観察されるので、(19) の仮定の妥当性が支持される。

(24) adverbial clause: mutative verb

a. a þa cume *monedeis* *lihting*

until come Monday's dawn

'until Monday's dawn comes'

(LH 45. 381 / Ohkado 1998: 70)

b. þt ga *þe* *hus* efter hire

that go the house after her

'if the house should go after her (=obey her)'

(SAWLES 166. 8)

(19) が正しいとすると、古英語と中英語に見られる (14)–(16)、および (20)–(24) のような非対格文において、どのようにTのPHON素性が満たされるのかが問題となる。Alexiadou and Anagnostopoulou (1998) は、ギリシア語やスペイン語におけるVSO語順を説明するために、[Spec, TP] を埋めることなくTのEPP素性を満たす可能性を提案している。彼女らによれば、(25) に例示されるVSO語順においては、主語が基底位置である [Spec, v*P] に留まっており、[Spec, TP] には虚辞のproを含めていかなる要素も存在しない。そして、(26) に述べるように、これらの言語が代名詞脱落言語であることから、Rizzi (1982) の意味においてその豊かな一致形態素が代名詞的であると見なされ、それが動詞移動によってTに移動する際にEPP素性を満たすことが出来ると提案している。

(25) Spanish

leyo Juan el libro

read Juan the book

'Juan read the book'

(Alexiadou and Anagnostopoulou 1998: 492)

(26) The rich verbal agreement of Greek and Spanish, which is responsible for their *pro*-drop nature, counts as a pronominal element, and hence can satisfy the EPP feature of T without filling [Spec, TP], when it is carried to T via verb movement.

EPP素性をPHON素性とPRED素性に分割するここでの分析の下では、この提案は以下のように述べ直すことが出来る。

(27) The rich verbal agreement of Greek and Spanish can satisfy the PHON and PRED features of T, when it is carried to T via verb movement.

すなわち、ギリシア語やスペイン語のような代名詞脱落言語における一致形態素は豊かであるので、TのPHON素性を満たすだけでなく、その形式から省略されている主語を復元することが出来るという点において叙述の主語を同定するので、TのPRED素性も満たすことが出来ると考えられる。したがって、これらの言語では、他動詞文においても主語が基底位置に留まることが可能であり、結果としてVSO語順が許されると説明される。

以上の議論を踏まえて、古英語と中英語における動詞屈折について考察する。中英語の弱変化動詞第I類の屈折変化表を以下に挙げるが、そこではすべての動詞形において

一致形態素が現れており、特に過去時制において一致形態素と時制形態素は独立している。

| | | |
|---------|--------------------------------------|------------|
| (28) | Middle English: <i>demen</i> 'judge' | |
| | present | past |
| sg. 1 | dem-e | dem-d-e |
| 2 | dem-(e)st | dem-d-est |
| 3 | dem-(e)þ | dem-d-e |
| pl. 1-3 | dem-ep/(e)n | dem-d-(e)n |
| | dem-Agr | dem-T-Agr |

(cf. Mossé 1952, 中尾 1972)

しかし、古英語と中英語の一致形態素は代名詞脱落を許すほど豊かではない。その理由としては、過去時制において1人称単数と3人称単数が同じ形であり、現在時制と過去時制の両方において複数形が人称に関わらず同じ形であるという点が挙げられる。以上の観察をここでの分析に取り込んで、以下のように仮定する。

(29) The “rich” verbal agreement of Old and Middle English can satisfy the PHON feature, but not the PRED feature of T, when it is carried to T via verb movement.

すなわち、古英語と中英語の一致形態素はすべての動詞形に現れ、ある程度豊かであるのでTのPHON素性を満たすことは出来るが、代名詞脱落を許すほど豊かではない。したがって、叙述の主語を同定することが出来ないで、TのPRED素性を満たすことが出来ないと考えられる。

以上の仮定に基づいて、古英語と中英語における主語の分布を説明する。まず、(29)が正しければ、古英語と中英語の他動詞文においては、一致形態素が動詞移動によってTのPRED素性を満たすことが出来ないで、主語が義務的に [Spec, TP] に移動してPRED素性を満たす。したがって、古英語と中英語の他動詞文における主語の分布は現代英語と全く同じである。一方、PRED素性を持たない非対格文においては、ある程度豊かな一致形態素が動詞移動によってTのPHON素性を満たすので、主語は [Spec, TP] に移動する必要はない。したがって、古英語と中英語の非対格文では、there構文以外の文脈においても主語が基底位置に留まることが可能であり、そのような場合には (20)–(24) で見たように、いかなる要素も [Spec, TP] に存在しない構造が許される。

次に、なぜ近代英語期に (14)–(16), (20)–(24) のような文が消失したのかを考察する。それにはある程度豊かであった一致形態素の消失が深く関わっており、16世紀までには3人称単数現在形、および2人称単数現在形と過去形を除くすべて動詞形において一致形態素が消失した。そして、Roberts (1993), Rohrbacher (1999), Vikner (1997) によれば、この一致形態素の消失により16世紀中に動詞移動が消失した。そうすると、動詞移動によってTのPHON素性を満たすことが出来なくなるので、主語の移動か虚辞の併合によって [Spec, TP] を埋める必要性が出てくる。したがって、(14)–(16), (20)–(24) のような文が16世紀中に消失したという事実は、その時期における一致形態素の消失に還元されることになる。

最後に、ここでの分析が正しいとすると、古英語と中英語において代名詞脱落が頻繁に観察される環境があれば、ギリシア語やスペイン語のように動詞移動によってTのPHON素性とPRED素性の両方が満たされるので、他動詞文の主語が基底位置に留まることが許されると予測される。そして、そのような環境では2人称代名詞主語が省略される命令文があるが、古英語と中英語の命令文の統語的特徴としては、動詞がCの位置まで移動し、代名詞目的語がほぼ義務的に転移されるということが挙げられる。命令文における主語の位置を調べるために、PPCME1を用いてnot, never等の否定要素を伴う否定命令文について調査した。しかし、予測とは異なり、主語を伴う否定命令文75例のすべてにおいて、主語は否定要素および転移された代名詞目的語に先行し、それらに後続する語順は観察されなかった。命令文の主語が否定要素に先行している例と、否定要素と転移された代名詞目的語の両方に先行している例を、それぞれ(30a, b)に挙げておく。

- (30) a. holde *thou* not forth thin honde on the child
 hold you not forth your hands on the child
 ‘Don’t you hold forth your hands on the child’ (OTEST XXII. 1G. 491)
- b. ne leaf *þu* me neuer nu iluðeres menne honde
 neg leave you me never now wicked men’s hands
 ‘Don’t you ever leave me now in wicked men’s hands’ (MARGA 58. 52)

以上の結果から、古英語と中英語における命令文の2人称代名詞主語は省略可能であるにもかかわらず、基底位置に留まることが出来なかったことになる。しかし、これは驚くべきことではなく、Van Kemenade (1987)を始めとするいくつかの研究において、古英語から14世紀後半頃までの代名詞主語は、接語あるいは弱代名詞としてCP領域あるいはCPとTPの境界に移動すると仮定されている。しかし、代名詞主語の接語あるいは弱代名詞としての位置付けが衰退した14世紀後半以降は、命令文の2人称代名詞主語が否定要素に後続する語順があっても全く不思議ではない。実際、Ukaji (1978)ではそのような語順を示す初期近代英語の例が観察されており、OEDやシェイクスピアの作品中にも以下のような例が見られる。

- (31) a. hold not *þou* with harlotes, here not heore tales
 hold not you with jugglers here not her tales
 ‘Don’t you hold with jugglers, here not her tales’ (1362 Langl. P.Pl.A. vii. 48 / OED)
- b. fear not *you* that
 ‘Don’t you fear that’ (Shakes. Wive. iv. 77)

これらの例では、2人称代名詞主語の省略を許す命令法の形態素が、動詞移動によってCの位置に移動する際に、Tの位置でPHON素性とPRED素性を満たすので、他動詞文の主語であっても基底位置に留まることが出来ると分析される。ただし、命令法の形態素は15世紀頃までに消失したので、それ以降は抽象的な形態素として存在していたと仮定する必要がある。しかし、その

ように仮定することにより、Henry (1995) で報告されているベルファースト英語における命令文の主語の分布が正しく説明される。その説明は (31) の場合と同じなので繰り返さないが、ベルファースト英語の命令文では動詞の形態は現代英語と同じであるが、動詞がCの位置へ移動することが可能であり、そのような場合には、主語がv*Pの境界を示す副詞や転移された代名詞目的語に後続する基底位置に留まることが可能である。

(32) Belfast English

a. Write carefully *you* that letter.

b. Give it *you* to the teacher.

(Henry 1995: 57)

5. 結 語

本論文では、現代英語における主語の分布に基づいて、EPPはPHON素性とPRED素性という、2つのインターフェイスにおける役割という観点から動機付けられる2つの素性に分割されるべきであることを提案した。そして、この提案に基づいて、EPPが動詞移動によって満たされるというAlexiadou and Anagnostopoulou (1998) の分析を修正することにより、古英語と中英語における主語の分布、および近代英語以降の発達が自然に説明されることを論じた。

最後に、本論文の分析がもたらす帰結について簡潔に議論する。第一に、古英語と中英語における主語の分布に関する説明において重要なのは、命令文以外の環境では動詞移動によってTのPHON素性は満たされるが、PRED素性は満たされないという点である。これが正しければ、TのPHON素性とPRED素性が独立した素性であることを支持する有力な証拠となる。動詞移動によって2つの素性が満たされるギリシア語やスペイン語の言語事実のみでは、それらが独立して存在するかどうかを決定することが出来ないので、本論文で考察した英語史における主語の分布に関するデータは、非常に価値のあるものであるとすることが出来る。

第二に、(20)–(24)に見られる、動詞がTPの先頭に来る従属節の例も注目に値する。古英語と中英語ではこのような例は稀であるが、非対格文においてのみ許されるという規則性があるので、無視すべき逸脱文ではなく文法的文であると考えられる。一方、Maling and Zaenen (1981)によれば、その他の点では類似した主語の分布を示すアイスランド語ではそのような語順は許されない。したがって、動詞移動がTのPHON素性を満たすことを直接的に支持する証拠は、(私の知る限り) 英語史における主語の分布からのみ得ることが出来る。

最後に、ここでの分析が正しければ、主要部移動が音韻部門の操作であるという、Chomsky (2001) の主張に疑問を投げかけることになる。古英語と中英語においては、命令文以外の環境では動詞移動がPFに関連するPHON素性のみを満たすので、それは音韻部門の操作であると主張することが出来るかも知れない。しかし、ギリシア語やスペイン語では、動詞移動が意味解釈に関わるPRED素性も満たすことが出来るので、それは音韻部門ではなく統語部門で起こると考

えなければならない。そうすると、動詞移動を統一的に扱うためには、少なくともTへの動詞移動はすべて統語部門で起こり、⁵ 動詞の発音される位置に関する変化という音韻効果のみを持つ場合と、それに加えて叙述関係を確立するという意味効果を持つ場合があると考えるのが妥当であろう。

注

* 本論文は日本英語学会第19回大会シンポジウム（2001年11月11日、於東京大学）における口頭発表に加筆・修正を施したものである。シンポジウムのメンバーである、石川一久氏、寺田寛氏、中野弘三先生には、発表に際して貴重な助言やコメントをいただいた。ここに記して感謝の意を表す。また、本論文は科学研究費補助金（基盤研究（C）課題番号19520419）の研究成果の一部である。

1. Chomsky (2007, 2008) では、Aバー移動は一致を含まず、フェイズ主要部の端素性 (edge feature) によって駆動されると主張されている。本論文の主な議論の対象は主語位置への移動というA移動であり、A移動に関してはChomsky (2000, 2001) の分析が現在まで踏襲されているので、ここでは本文で導入した分析に基づいて議論を進めることにする。
2. この違いについての原理的な説明は今後の課題とし、完全な \emptyset 素性を持つ v^*P を選択する他動詞文のTとは異なり、完全な \emptyset 素性を欠いている vP を選択する非対格文のTは素性の点で不完全であり、PRED素性を持たないことがありうると暫定的に仮定しておく。
3. Ogura (1986) による詳細な調査においては、非人称受動態において与格名詞句と属格名詞句が虚辞のitと共に観察されているのみである。
4. (14)–(16) は非対格文であり、主語が動詞の後ろに来る提示文であると考えられるので、PRED素性はここでの議論には関与しないことに注意すべきである。
5. 同様の結論は、Koenenman and Neleman (2001), Zwart (2001) においても支持されている。

参考文献

- Alexiadou, A. and E. Anagnostopoulou (1998) "Parameterizing AGR: Word Order, V-Movement, and EPP-Checking," *Natural Language and Linguistic Theory* 16, 491-539.
- Allen, C. (1995) *Case Marking and Reanalysis: Grammatical Relations from Old to Early Modern English*, Clarendon Press, Oxford.
- Breivik, L. (1990) *Existential THERE: A Synchronic and Diachronic Study*, Norvus Press, Oslo.
- Cardinaletti, A. (1997) "Subjects and Clause Structure," in L. Haegeman, ed., *The New Comparative Syntax*, Longman, London.
- Chomsky, N. (2000) "Minimalist Inquiries: The Framework," in R. Martin, D. Michaels, and J. Uriagereka, eds., *Step by Step: Essays on Minimalist Syntax in Honor of Howard Lasnik*, MIT Press, Cambridge, MA.
- Chomsky, N. (2001) "Derivation by Phase," in M. Kenstowicz, ed., *Ken Hale: A Life in Language*, MIT Press, Cambridge, MA.
- Chomsky, N. (2007) "Approaching UG from Below," in U. Sauerland and H.-M. Gärtner, eds., *Interface + Recursion = Language?: Chomsky's Minimalism and the View from Syntax-Semantics*, Mouton de Gruyter, Berlin.
- Chomsky, N. (2008) "On Phases," in R. Freidin, C. Otero, and M. Zubizarreta, eds., *Foundational Issues in Linguistic Theory: Essays in Honor of Jean-Roger Vergnaud*, MIT Press, Cambridge, MA.
- Guéron, J. (1980) "On the Syntax and Semantics of PP Extraposition," *Linguistic Inquiry* 11, 647-678.

- Henry, A. (1995) *Belfast English and Standard English: Dialect Variation and Parameter Setting*, Oxford University Press, Oxford
- Holmberg, A. (2000) "Scandinavian Stylistic Fronting: How Any Category Can Become an Expletive," *Linguistic Inquiry* 31, 445-483.
- Kemenade, van A. (1987) *Syntactic Case and Morphological Case in the History of English*, Foris, Dordrecht.
- Kemenade, van A. (1997) "V2 and Embedded Topicalization in Old and Middle English," in A. van Kemenade and N. Vincent, eds., *Parameters of Morphosyntactic Change*, Cambridge University Press, Cambridge.
- Koenenman, O. and A. Neeleman (2001) "Predication, Verb Movement, and the Distribution of Expletives," *Lingua* 111, 189-233.
- Maling, J. and A. Zaenen (1981) "Germanic Word Order and the Format of Surface Filters," in F. Heny, ed., *Binding and Filtering*, MIT Press, Cambridge, MA.
- Meinunger, A. (2000) *Syntactic Aspects of Topic and Comment*, John Benjamins, Amsterdam.
- Mósse, F. (1952) *Handbook of Middle English*, The John Hopkins Press, Baltimore, UD.
- 中尾俊夫 (1972) 『英語史Ⅱ』大修館書店、東京.
- Ogura, M. (1986) *Old English 'Impersonal' Verbs and Expressions*, Rosenkilde and Bagger, Copenhagen.
- Ohkado, M. (1998) "On Subject Extraposition Constructions in the History of English," *Studies in Modern English* 14, 53-78.
- Pintzuk, S. (1993) "Verb Seconding in Old English: Verb Movement to Infl," *The Linguistic Review* 10, 5-35.
- Pintzuk, S. (1999) *Phrase Structures in Competition: Variation and Change in Old English Word Order*, Garland, New York.
- Rizzi, L. (1982) *Issues in Italian Syntax*, Foris, Dordrecht.
- Roberts, I. (1993) *Verbs and Diachronic Syntax: A Comparative Study of English and French*, Kluwer, Dordrecht.
- Rohrbacher, B. (1999) *Morphology-Driven Syntax: A Theory of V to I Raising and Pro-Drop*, John Benjamins, Amsterdam.
- Sacson, G. (1993) *Post-Verbal Subjects: A Study Based on Italian and its Dialects*, Doctoral dissertation, Harvard University.
- Tanaka, T. (2002) "Synchronic and Diachronic Aspects of Overt Subject Raising in English," *Lingua* 112, 619-646.
- Ukaji, M. (1978) *Imperative Sentences in Early Modern English*, Kaitakusha, Tokyo.
- Vikner, S. (1997) "V⁰-to-I⁰ Movement and Inflection for Person in All Tenses," in L. Haegeman, ed., *The New Comparative Syntax*, Longman, London.
- Zwart, J.-W. (2001) "Syntactic and Phonological Verb Movement," *Syntax* 4, 34-62.

Abstract

The EPP Reconsidered: Evidence from the Distribution of Subjects in the History of English

Tomoyuki TANAKA

This paper aims to account for the distribution of subjects in the history of English, by reconsidering the EPP in the light of its roles at the two interfaces, PF and LF. First, based on the distribution of subjects in Present-day English, it is proposed that the EPP should be split into the phonological (PHON) feature and the predication (PRED) feature, which are motivated by their effects on interpretation at PF and LF, respectively. Then, recasting and extending under the above proposal Alexiadou and Anagnostopoulou's (1998) analysis of EPP satisfaction, it is argued that the "rich" verbal agreement of Old and Middle English serves to satisfy the PHON feature, but not the PRED feature of T, when it is carried to T via verb movement. This allows us to derive the freer distribution of unaccusative subjects in Old and Middle English, as well as the obligatory raising of transitive subjects throughout the history of English. As a consequence of the present analysis, the change in the distribution of unaccusative subjects is shown to be attributed to the loss of the "rich" verbal agreement and verb movement during the sixteenth century.